

畑ピアノ

町田第鶴川第二中学校 三年 村山 愛以

丘の上にぽつんと古びたピアノがあつた。鍵盤は日に焼けて白と黒のまだらな模様になつてゐる。世間では「畑ピアノ」と呼ばれていた。果物畑を営む青年は幼い頃からこのピアノと畑で育つた。畑を耕し、種をまき、そしてピアノを弾く。彼の奏てるピアノの音色に合わせて、畑に実る果物の種類が変わるものだ。

「今日はどんな音色にしようかな」彼は鍵盤に手を載せる。最初に選んだのは、軽やかで弾むような音色。ト長調の明るい和音が響き渡ると、畑には瞬く間に赤く丸い実が姿を現した。「よし、サクランボだ」太陽の光を浴びてキラキラと輝くサクランボ。その甘酸っぱい香りが風に乗つてあたり一面に広がる。収穫したばかりのサクランボを口に運ぶと、顔が自然とほころんだ。

次の日、青年は少し物憂げな音色を奏でた。それは短調の、どこか哀愁を帯びたメロディー。指先から紡ぎ出される音は、まるで夜空に瞬く星のよう。すると、畑に実ったのは、深い紫色のブドウだった。「巨峰だ。今年は粒が大きいな」一粒一粒が、まるで宝石のように輝いている。青年は、ブドウを収穫しながら、この音色を奏でた時の気持ちを思い出していた。少し寂しい、でもどこか温かい、そんな感情。その感情が、ブドウの深い甘さとなり、口の中に広がっていく。

ある晩、激しい雨が降り、青年の心はざわついていた。天候が荒れると、ピアノの音色も不安定になりがちだ。青年は、どんな時もピアノに向かつた。荒々しく、そして力強く鍵盤を叩く。それはまるで、雷鳴のような音。青年の心の叫びが、音となつて畑に降り注ぐ。すると、畑の土から、ゴツゴツとした大きな実が顔を出した。それは黄色い縞模様のスイカだった。「なんだ、スイカか。てっきり何もできないと思つたよ」青年はスイカを抱え上げ、笑つた。雨上がりの空気に満ちた畑で大きなスイカを割る。中からは真っ赤な果肉が顔を出した。青年は一口食べると、そのみずみずしい甘さに驚いた。

畑ピアノは、ただ果物を生み出すだけじゃない。弾く人の心を映し出し、その心を果物という形にしてくれる。そして、その果物を食べた人の心も、豊かにしてくれるのだ。今日もまた、丘の上に立つ畑ピアノから、様々な音色が響き渡つてゐる。それぞれの音色に込められた青年の思いが、色とりどりの果物となり、心を温かく満たしていく。

東京町田・中ロータリークラブ会長賞
村山愛以「畑ピアノ」

審査員講評 *****

全体を通して、まるでレンズ越しにのぞいているような、統一されたトーンで素敵な世界観が広がっていました。読みながらその場にいるような気持ちになり、風や匂い、ピアノの音色まで感じられる書きぶりが印象的でした。

— KEN THE 390

東京町田・中ロータリークラブ会長賞
村山愛以「畑ピアノ」